



切り絵 比企善彦作

うぶすな

茨木神社社報

発行所

茨木神社社務所

茨木市元町4-3

072 (622) 2346

[http://www.](http://www.ibarakijinja.or.jp/)[ibarakijinja.or.jp/](http://www.ibarakijinja.or.jp/)

戦後の夏まつり

のあゆみ

茨木神社の夏祭の神輿の渡御は、遅くとも江戸時代中期には始められたと伝えられ、『島下郡の祇園祭』として親しまれてきました。

戦前までは氏子全町を七組に別け、その年の当番町が祭礼全体を取り仕切り執行されてきました。

戦後の混乱で一時、中断がありました。多くの氏子の人達の復興を願う声があがりました。早速、復興に向けた話し合いが始まり、その中で、それまでの当番町による執行から氏子全体による運営へと替わり、各町の代表として各自治会長による祭礼委員会が組織され夏祭が復興したのです。

昭和三十年代に入ると氏地も市街化が進み、人口増と共に子ども達も増えていきます。祭礼委員会では、子ども達にも祭に参加しその楽しさとふるさと意識を育むとともに祭を一層盛大に催そうと毎年のように子ども神輿を一基ずつ新調し、昭和五十年代にはひもろぎ神輿二台、子ども神輿六基、枕太鼓二台を擁するに至りました。

平成に入ると、少子化が進み子ども神輿の参加者も減少傾向となり、平成七年からは、男女の中学生の神輿が渡御列に加わることになりました。中学生の女子の神輿の澁刺とした姿は、全国的に「ギャルみこし」の愛称で親しまれている女性神輿の影響もあり、平成十六年には当社にも女性の氏子による女性神輿が登場しました。

神輿の渡御は、午前十時からの出幸祭の後、大神輿、枕太鼓、子ども神輿、中学生神輿、女性神輿が夕刻にかけて氏地を巡幸します。

夕刻から始まる御神輿の宮入では、勇壮な大神輿にさきがけ、子ども神輿、中学生神輿そして女性神輿が二時間近く、宮入が繰りひろげられます。

日本の偉人

坂上田村麻呂

当神社の由緒書きに「大同二年（八〇七年）坂上田村麻呂が荊切の里をつくりしとき、天石門別神社が鎮座された」と伝え、坂上田村麻呂の名が記されています。

坂上田村麻呂公が歴史の舞台に登場するのは、八世紀の後半、平安時代の初めの頃、東北平定のため征討軍十万人の副将として派遣されることから始まります。延暦十年（七九一年）、田村麻呂公三十四歳。この征討以降、彼は、「陸奥・出羽按察使」「陸奥守」に任命され、東北地方の行政の責任者として深く関っていくこととなります。中央朝廷に従わない東北地方の人達は蝦夷と呼ばれ、それまで幾度となく征討と反乱が繰り返されてきました。その最終局面に登場したのが坂上田村麻呂公でした。

延暦十六年（七九七年）、朝廷は彼を、後の時代、武人の最高官職である「征夷大將軍」に任命し

ます。この征討軍の派遣により朝廷の支配地域は、それまでの多賀城（宮城県仙台市付近）からいっきに北へと広がり、今日の岩手県水沢市付近に胆沢城が築かれます。

田村麻呂公の征討の手法は、武力と懐柔そして平定地での農業開発であった。彼は反乱の首謀者達は、遠くは日向国（宮崎県）をはじめ各地へ移住させるとともに帰順するものについては「姓」「位」を授け、また農地の開墾や養蚕等の移入を積極的に推し進めたのでした。ついに延暦二十一年（八〇二年）最後まで抵抗した蝦夷最大の首長「アテルイ」が五百余人を連れて彼に投降するに至ります。彼は「アテルイ」を京まで連れて行き放免することを主張するが聞き入れられず「アテルイ」は処刑されます。

アテルイの投降により東北地方は、ほぼ平定され、翌延暦二十二年（八〇三年）田村麻呂公は、将

来の安定をめざす朝廷の出先機関としての志波城（岩手県盛岡市付近）造営のため休む暇なく下ることになります。

志波城造営からいつ京に戻ったかは分からないが翌延暦二十三年八月には、摂津・和泉両国に天皇巡幸のための仮宮殿・行宮設定のため派遣されます。当社由緒書に云う「荊切の里」ができる三年前のことです。そして弘仁二年（八一一年）五十四歳の生涯を閉じるのですが、勅命によりご遺体には、甲冑・剣・鉾・弓を持たせ東北、陸奥へ向かって葬られました。このことから、天皇の田村麻呂公に寄せる平安・守護の強い願いが伝わってきます。

坂上田村麻呂公は、永い征夷の歴史の最後に登場し、征夷大將軍という武人の最高位に就き、征討と懐柔そして民生安定に努めました。その後、彼は征服者として憎悪されるのではなく、武勇・人望・人徳を称え、思慕されることになりました。

田村麻呂公の創建または関係すると伝えられる社寺が東北地方を

はじめ各地に多数存在し、さらに鎌倉時代の「吾妻鏡」「保元物語」、室町時代の「義経記」「田村草子」等の書物にも度々登場し、田村麻呂公の武勇が語り継がれていることから伺えます。

スロープ

本殿西側に常設のスロープを新たに設置しました。

足のご不自由な方や車椅子・ベビーカーでご参拜の方にお書錢箱の前までお参りしていただくことが出来るようになります。どうぞご利用ください。



奉賛会だより

茨木神社奉賛会は大神様に崇敬の誠を捧げ、護持することを目的として結成されております。毎年四月十八日、当社の春祭(祈年祭)に合わせて奉賛会厄除安全祈願祭並びに総会が開催されます。

本年も雲一つない日本晴れのもと午後二時より本殿での祭典が斎行され、次いで参集殿二階で総会が行われました。

総会では、開式の辞のあと、神宮並びに皇居遙拜、国歌斉唱、敬神生活綱領唱和に続き、木内孝至会長より挨拶がありました。審議



事項に入り昨年度の事業報告・決算及び今年度の予算等承認されました。

総会后、宮司より「古事記編纂千三百年におもう」と題し講話がありました。その中で「どの民俗にも民族のこころは『ことば』の中にあります。我が民族は、森羅万象、山川草木全ての物に靈性を感じ、そうした生活から『ことば(単語)』が生まれてきました。即ち、我が祖先が長い時間をかけ

宮司浄階授与報告

この度、神社本庁より宮司に対し三月一日神職として最高階位である浄階とそれに伴い神職身分も一級が授与されました。

これ偏に総代様をはじめ氏子・崇敬者各位のお力添えの賜物と厚く御礼申し上げます。

神職マメ知識

神職には、資格が必要で取得するには神道系の大学を出る(明階)、神職養成所に通う(正階)、神職養成講習会に参加する(権正

て培ってきた思想・精神が言葉に内在しているのです。」など、古事記の一文を例にとり、その意味するところのお話をいただきました。

奉賛会では、奉賛会員厄除安全祈願祭の斎行、総会の開催の他

○「大祓」「茅の輪神事」斎行案内並びにその際の「人形代」及び「神楽奉納券」の配付

○夏祭の案内並びに「神楽奉納券」の配付

○新年の諸行事の案内並びに

階・直階)などの方法があります。

それにより得られる階位が違います。浄階については、奉仕の経歴や功績などにより授与されます。身分も経歴や神社界に対する功績をもとに選考され特級・一級・二級上・二級・三級・四級の区分があります。

また、神社内での役職は職階といます。お宮を代表する宮司、宮司を補助する禰宜、禰宜を補助する権禰宜、神職の見習的な職務を行う出仕等があります。神職の多い神社には宮司の役目を補佐する権宮司をおく神社もあります。

「神札」「曆」「干支置物」の配付

○節分祭並びに「鎮魂星祭」斎行案内及び「神楽奉納券」の配付

○毎月一日にその月に誕生日を迎えられる会員の誕生祭の斎行

○四月八日「人形奉焼祭」斎行案内

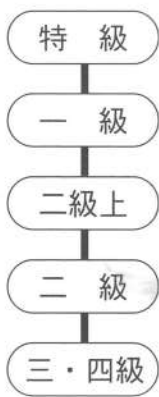
等おこなっております。年会費は三千元です。

奉賛会では、随時入会者を募っております。社務所までお問い合わせ下さい。

階位



身分



職階



「茨木」古代の読み方 「牟波良岐」

古代、地名は、そこに住み生活する人々の必要から名付けられ、その後、必要に迫られて漢字が当てられました。常陸国茨城(現茨城県)について古事記では「茨木」、日本書紀では「茨城」と表記されていることから、当て字であることが伺えます。

それでは「茨木」「茨城」はどのように読んだのでしょうか。

平安時代後期に編纂された我が国初の漢和辞典「和名類聚鈔」に「茨城 牟波良岐国府」とあります。それは「茨城」は「牟波良岐」と読み「国府」があるところという説明です。つまり、「茨城」を「ムハラキ」と発音していました。

また、「牟波良岐」の意味を考えるとき「日本書紀」の注釈本に「是を天国排開広庭尊とす。」



開、これをば波羅企と云ふ」とあります。この御方は、後の欽明天皇のことで、「開」を「波羅企」と読むと説明しています。後の「ヒラキ(開き)」を当時は「波羅企」といったのです。

いずれも漢字は当て字であり、牟波良岐(ムハラキ)波羅企(ハラク)と発音し、その意味するところは、開く・開発する・開拓地なのです。

そして此の村に村人達は開発・開拓の神を祀る「天石門別神社」を勧請します。

このようにこの地に人々が住み開墾し土地を拓いていきました。それは辛い過酷な作業でした。人々は、開拓を守護し、村の発展を祈り・願って「天石門別神社」を祀ります。そして土地(村)の名を当時、開発・開拓地を意味した「牟波良岐(波羅企)」と名付け、当て字で「茨木」と表記したのです。「牟波良岐(ムハラキ)」の読みは、時代を経る過程で変化し、「ムバラキ」・「イバラキ」となります。

昨年完成した東門脇の休憩所に古代の此の里の読みを留めるべく「牟波良岐舎」と命名しました。

茨木音楽祭2012開催

去る五月五日、今年で四回目となる「茨木音楽祭」、通称「茨音」が茨木市中央公園グラウンドを中心に各会場で開催されました。今年も、当神社の境内が会場の一つになりました。「鑑賞の杜」と名付けられた境内では、様々なジャンルのアーティストが演奏をくり広げご本殿の北側「黒井の清水」あたりでは野点が催されました。

また、今年「杜のワークショップ」という工作教室が開かれ、和菓子づくりや写真立ての工作に小さなお子さんが熱心に取り込む様子が見受けられました。

今年も好天に恵まれ、多くの人々が市内各会場を巡り、終日大変な盛況ぶりでした。もうすつかり茨木市の恒例行事として親しまれつつある「茨音」。地元の高中生や若者を中心に企画運営されていますが、年ごとにスケールやその内容も充実しているようです。このような人と人との交流を深める催しは、町を活性化させる効果があるのと同時に、人間の「絆」を



芽生えさせ、さらには郷土に対する愛着をも根付かせる、ひとつのいきつけになるのではないのでしょうか。

御奉納報告

末社恵美須神社の鈴の緒は、元恵美須講講元の魚崎千萬男様ご夫妻から御奉納いただきました。今般魚崎様のご息女中野タツ工様より御奉納いただきました。厚く御礼申し上げます。

